



愛隣幼稚園..... 園だより 13. 5月号

言葉にする

毎朝見ている某テレビ局の情報番組で、「1年生に友だちができる瞬間」を取材した様子を放送していました。<気になって友だちになりたいと思っている子に勇気を振り絞って「ねえ、お友達になって」と声をかけると、相手の子は「いいよ!」と快諾。今日が友だちの始まりです。>というような内容でした。「ねえ、お友達になって」この一言があっさり言えたらいいのですが、今日の映像の中にいた男の子は、そういうタイプの子どもではありませんでした。声をかける勇気がなくて、担任の先生に励まされ背中を押されてやっと気持ちを伝えることができました。心の葛藤は目には見えにくいのですが、今日の出来事はこの子にとっては一大事でした。そうとわかってはいても、やはり表面的にはスマートに映る「友だちができる瞬間」を、私は幼稚園の子もたちのそれと比較してしまいました。

幼稚園ではこんなスマートなやりとりは起こりません。特にたんぼぼ組ではこんなことにはなりません。友だちになりたい時の表現方法は10人10色です。砂場で並んでプリン作り。同じことをしている同じバッチの子に気付いているのかいないのか、それでも、どこかで同じ楽しさを共有しながら同じ時間を過ごしなんとなく友だちになっていく。・・・これはとても平和なタイプですが、こんなタイプもあります。「わっ、あの電車ごっこやってるBくん、大好き!一緒にあそびたい!」Aくんはそう思った瞬間、一気にBくんへ突進。体当たりド——ン。Bくんは驚いて泣き出してしまいました。まさかとお思いでしょうがこんな「大好き!いっしょにあそぼう。」という表現もあるのです。傍目にはそうは見てもらえません。「あー、あの電車が欲しかったのね。でも突き飛ばされた子はかわいそう。」「いやな子、意地悪。」そう、そのとおりです。でも、そばにいてよくよくその子を見てみると、「体当たりド——ン。」の本当の意味がわかるようになります。そのあともAくんはBくんのことが気になってしかたありません。大好きなのでギュ——と羽交い絞め、一緒にあそびたくてBくんのあそんでいるところに行つては、やたらとちょっかいを出しています。「大好き、あそぼー」と言えたら簡単なのかもしれませんが、それができないのがたんぼぼ組と思えば納得ができます。Aくんに対する見方も言葉掛けも違ってきます。子どもたちは様々な方法で気持ちを表現するのです。コミュニケーションを円滑にする手段として言語があることを私たち大人は知っていて、それを当たり前のことだと思っています。しかし、子どもたちは違います。「(あの赤い三輪車に乗りたい)かして!」当たり前にそう言えるようになるのは年中になってからです。それまでは叩いたり、噛みついたり、無理やり取ってしまったり。手っ取り早い方法で、「僕は三輪車にのりたい!」という気持ちを表現します。先生たちは「三輪車、乗りたいだ。かしてって言うといいよ。」と繰り返し伝えていきます。また、2歳を過ぎた頃から子どもたちは“自分”を主張し始めこれはかなり大きくなるまで続きます。その始まりは何でもかんでも「いやっ」というあれです。お母さんと一心同体だった自分から、お母さんと同じではない自分を意識し様々な方法でそれを確認し始めます。そうかと思えば「みてみて」頻繁になります。ほくはほくと主張しながら、お母さんとの繋がりも確認したいのです。自立と依存の間で子どもたちの葛藤が始まります。そんな時、妹や弟が生まれれば大人の視線は、一気に小さなライバルに奪われてしまいます。「さみしいよ〜、ほくのこともみてよ。ぎゅってして!」と言えればいいのですが、大抵そんな時は、よからぬ行動を繰り返し大好きなお母さんの視線と気持ちを取り戻そうと必死になるのです。だからどうか頭ごなしに叱らないでほしいのです。「なんでそんなことばかりするの!」「うゑーん・・・(ほくも一生懸命なんだよ〜うまく伝えられないんだけど、大好きなんだよ〜お母さんってばあ)」涙と一緒にこんな子どもの声が聞こえてきます。だからそんな時は、行動の裏に隠れている子どもが表現しきれない感情、自立と依存の間で揺れる想いを言葉にして返してあげてください。「大丈夫、見てるよ。大好きだよ!」その安心の中でやがて子どもたちはコミュニケーションとしての言語を獲得していきます。